

---

# 倉庫番と仔犬

乙狩曰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

倉庫番と仔犬

### 【Nコード】

N7228M

### 【作者名】

乙狩曰

### 【あらすじ】

私は非合法の貸し倉庫の運営で生計を立てている。

大きいものは戦車から小さいものはウィルスまで、どんなやばい物でも預かり顧客が望む期間保管するのが私の仕事だ。

私は非法の貸し倉庫の運営で生計を立てている。

大きいものは戦車から小さいものはウイルスまで、どんなやばい物でも預かり顧客が望む期間保管するのが私の仕事だ。

「そういうわけで、ぼくをあずかってほしいのでふ」

「何がそういうわけなのかさっぱり分からんが……」

今、私の前にいるのは決して舌足らずな男の子というわけではない。目の前のソファーにいるのは芝犬の子犬だ。ソファーの上に登って行儀良くお座りしている。

背中に小さいリュックを背負い、ソファーの下にはドッグフードを満載したヒモつきのラジオフライヤーカートが置いてある。ヒモを咥えてここまで引っ張ってきたらしい。

「でふから、ごしゅじんさまたちがきゅうになくなってしまったでふ」

「いなくなつた？」

「けさおきたら、おうちにはだれもいなかったのてふ……」

ふむ。恐らく夜逃げでもしたのか。あるいは引越し先の家がペット禁止の物件で、飼い犬を捨てていったのか。恐らくそんなところだろう。

まあ無責任な飼い主というのはさほど珍しいわけではない。

「なので、ごしゅじんさまたちがむかえにくるまで、ぼくをあずかってほしいのでふ」

「……まあウチではどんなものでも預かるのが自慢だが、支払いはどうするんだ？」

「あんまり、おかねというものはもってないんでふけど……」

そう言うと子犬は器用に背中のリュックを下ろし、鼻先で中をごそごそと探る。

取り出したのは、子供用と思しき、アニメのキャラクターがプリントされた小さな財布だった。

「ゆうべ、けんすけくんがぼくにくれたんでふ。きのうは、なんでなのかわからなかったんでふが、きつとこのためだったんでふね……」

中を確認すると、千円札が二枚に小銭少々。

ケンスケとは、この子犬が飼われていた家の子供のことだろう。

子犬を置いていくことを親から聞かされ、子犬のためになけなしの小遣いを渡したのだろうか。

犬に金の使い方が分かれるとも思えないが……。猫に小判ならぬ犬に夏目漱石というところか。

「おうちには、ごはんもたくさんおいてあったでふ。きつとむかえにいくまで、このおかねとごはんをつかって、おとなしくまっていふ、ということだとおもうんでふ」

どうやら自分が捨てられたということが分かっているらしい。それとも気づかないフリをしているのか。

「でも、おうちでばくだけでまってる、いろいろとあぶないでふ。『ほけんじょ』っていうおばけにみつかったりしたら、ごしゅんさまのいない、いぬやねこは、みんなどこかにつれていかれてたべられちゃうっていうし……。でふから、ここでばくをあずかってほしいのでふ」

「ふむ……話はわかった。だがしかし、たったこれだけの金じゃー泊分の料金にもならんぞ?」

「たりないぶんは、ごしゅんさまがむかえにきたときにはらってくれまふ!」

「ふ、む……」

そんな日は恐らく永久に来ないのだが。

「おねがいしまふ! いっしゅうかんでもいいんでふ!」

そう言って子犬はソファアの上で、きゅっと目をつむりながら土下

座をした。傍目には伏せの体勢にしか見えない。

少し迷ったが、ここしばらくは他に生き物などの手のかかる預かり物もないし、何より人語を話す犬も最近は珍しくなったので興味本位で引き受けることにした。勿論採算は度外視だ。

「あ、ありがとうございますっ！」

そう言つて子犬は土下座（伏せ）の姿勢のままですらにこれでもかと頭を下げた。おかげで鼻先がソファに埋まつてゐる。

この仔犬（名前は三郎太というらしい）は思つていたより賢い犬のようだ。

私が客と話していると、どうやって入れたのかは分からないがお茶をヒモつきカートに載せて持つてきて、

「そちやでございまふ」

そう言つて客に出したりする。

またある時は、人間用のトイレから用を済ませて出てきた三郎太に行き会つた。

「あ、といれつとぺえばあがきれていたので、こうかんしておきまふた」

賢いにも程がある。

普段、三郎太は自宅から持ってきたカリカリのドッグフードを食べていたが、ふと思いついて冷めたご飯に味噌汁をかけたものを与えてみた。

「……………！！」

おいしいでふね！これおいしいでふね！！  
なんていうごちそうでふか？！」

「ねこまんまというものだ」

「こんなおいしいものたべたことないでふ！  
こんなものがよのなかにあっただんでふね……………」

「気が向いたらまた作ってやってもい……………」

そこで気がついた。

明日で約束の一週間だということに。

三郎太は私の考えてることに気が付いたらしく、先ほどとは打って変わって暗い表情でねこまんまをモソモソと食べている。

「なあ三郎太……………もしお前がよかったら、なんだが……………」

「それいじょうはいわないでください」

「……………」

「もしぼくがノラだったなら、よろこんであなたをごしゅじんさまとよんだでふ……。」

でもぼくには、もつごしゅじんさまがいまふ……」

「……捨てられたのにか？」

自分がこんなことを言うなんて、自分でも意外だった。

三郎太自身が、自分が捨てられたという事実には薄々気づいてるということを私は知っていたのに。

それほどまでに、私はこの仔犬を失いたくなかったのか。執着していたのか。孤独を恐れていたのか。

「……もし」

三郎太の一言に、思考の渦から引き上げられた。

「もしごしゅじんさまたちが、ぼくをすてたのだとしても……、やっぱりぼくにとってのごしゅじんさまは、けんすけくんと、おとうさんと、おかあさんだけでふ……そのきもちにうそはつきたくないでふ！」

「……あーわかったわかった。ただの冗談だ。そう真に受けるな」

「……ごめんなさいでふ……」

「だから謝るな！……なんだか女に振られた男みたいじゃないか」



「ぼくオスでふよ?」

「そういうこと言ってるんじゃない」

「……もし」

「ん?」

「もしあしたまでに、ごしゅじんさまがむかえにきてくれなかったら……、ぼくは『ほけんじょ』にうつられて、たべられちゃうんでし  
ようか……」

「……さあなあ、とりあえず明日になって迎えが来なかったら、そ  
うするかもしれんな」

「……」

次の朝。

事務所の前の道路で、私と三郎太は向き合っていた。

三郎太は一週間前にここに来たときと同じようにリュックを背負い、  
カートを引いている。

カートのヒモは口で引いていくのは大変だろうから、私が改造して  
リュックの左右に繫げられるようにしておいた。

リュックとカートの中には、昨日私がこっそり買ってきておいたドッグフードが満載してある。

「あの、これはいったいどういうことでふか……？」

「生憎と私も『ほけんじょ』というのが大嫌いだな。

お前を奴に引き渡すくらいなら追い出すほうがまだマシだ」

「あ……ありがとうございますでふー！」

「礼を言うのはまだ早い」

「え？」

「こつちも商売だ。

この一週間のお前の保管代と、エサ代と、そのリュックとカートに満載してあるペットフード代、きっちり耳揃えて払ってもらう。

請求書はお前のリュックの中の、ケンスケくんのサイフに入れておいた」

「え、えと……あの……」

「たった二千円ぽっちじゃ消費税にもならないからな。料金はお前のご主人様とやらからまとめて支払ってもらうさ。

……だから必ずご主人様を見つけて、絶対にここまで、それこそ首に縄括りつけてでも連れて来い」

「……はいでふっ!!」

そう言つて三郎太は頭を深く下げ、朝焼けに照らされる歩道を胸を張つて歩き出した。途中で何度も振り返り、その度に頭を下げながら。

その夜、珍しく深酒をした私はソファアの上でうたた寝をしながら、三郎太の夢を見た。

三郎太は重いカートを引きながら、飼い主を探し求めて旅をしていた。その表情は誇りと喜びと希望に満ちている。

時には車に轢かれそうになり、時には行く先々の人々や犬達の親切に助けられたり、くじけそうになりながらも、ゆつくりとではあるが歩みを進めていた。

月明かりが照らす海岸を。

朝もやに煙る峠道を。

下校中の子供達の笑い声が響く田んぼ道を。

雪の降り積もる町の中を。

誇らしげな顔でただ前だけを見て、4本の足で歩いていた。

あれから半年が経つ。

三郎太が飼い主と出会えたという便りはまだない。

きっと今でも、飼い主を探して日本中を旅しているのだろう。

私はそう信じている。

（後書き）

7 / 26 推敲。

『ねこまんま』でググって、犬猫にねこまんまは塩分過多で健康上好ましくないという事実を知る。

話の展開上、作中で保健所を「大嫌い」と書いてますが、保健所及び保健所職員の方々を貶める意図は一切ありません。気分を害した方には謹んでお詫び申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7228m/>

---

倉庫番と仔犬

2010年10月16日10時04分発行